ティー・ブレイク

NO. 94

座　敷　童　子

クライアントの中にも妙な人がいて，「とにかく行こう」と言う。私は，そういった類のものを信じてはいない。当然のことながら，そんなものは見えるはずもない。

場所は，東北新幹線の二戸の駅から降りて，車で15分ほどの金田一温泉で，旅館の名前は「緑風荘」，「それ」が出るという部屋は「エンジの間」である（注：「エンジ」は何か当て字のような難しい漢字）。

見た目は，そう大したことはない旅館である。「高級」などではなく，屋根もトタンである。それに，懐かしい木の柱，畳，襖，本当の木の廊下，本当の木の天井。昔ながらの日本家屋である。

住まいがマンションの住民には，鉄筋のホテルというもののほうがかえって居心地が悪い。こうした木造の，すきま風が吹き抜けるような旅館のほうが，ほっとする。

誘われたかの時期，実は事務所は相当に忙しいときであった。実を言えば，断りたかった。

ただ彼はかつて言った。「要は，君は自分の信用で商売をする職業だな。だとしたら，「衣食住」でこの順に揃えて行きなさい。いいかい。衣食住だよ。この順序を忘れてはいけない。」と私に諭した。最初に聞いたときは半信半疑であったが，実行してみた。その言いつけの通り，住宅ローンを組むよりも先に，高価なスーツを揃えたのであった。

よくよく考えてみれば，貧相な弁理士に仕事を頼もうとする人は少ない。悲しいことだが，これが現実である。悔しいことであるが，何にしても，見ばえというものが重要なときもあるのである。また，「食」にしても，これに少し関心をもつようになったおかげで，他人をもてなし，喜ばせることができる機会が増えた。そうしてマイホームは，後回しになった。

こうして今が在ることを思えば，人間努力と心がけが全てであり，それこそ座敷童子など居るわけがない。そう思って北枕（注：北枕でないと出ないそうである）の布団に入った。そうして寝入ったのであるが，夜中に人の気配がし，重い気配を感じて目を覚ますと，そこには見慣れぬ子供の顔があった。

帰りのタクシーの中で，「あれは夢だったのか」とも思ったが，あざやかな紅葉の中を走るうちに，都会の喧騒はすっかり体の中から抜けていた。そうして，「ここにつれてきた彼の真意はというのはいったい何だったのか」と思いもしたが，それも後になってわかることだとも思い，ただ心地良いまどろみの中に身を任せることにしたのである。　（正）